緑の地球を子どもたちへ

パック連通信

No.141 2025年11月20日発行
全国牛乳パックの
再利用を考える連絡会

事務局：山梨県大月市御太刀 1-2-10
TEL. 0554-22-3611

全国パック連40年を振り返る　1993年代表の逝去

1993年１月８日、牛乳パック再利用運動の生みの親であり全国パック連の代表の平井初美が、小腸間膜腫瘍により、最期は肺炎を併発して亡くなりました。

前年８月１日～2日に北九州で開催された第６回全国大会へは、執念で病気を押して参加し、代表としての役目を果たしましたが、以降自宅療養を経て近くの総合病院に入院となりました。入院中、多くの運動仲間が県内外からお見舞いに来てくださり、「平井さんに会うと元気をもらえる」と話す方もいるほどしっかりと対応していましたが、病状は悪化する一方でした。医師から「癌がメロン大にまでなっている」という説明を受けた時は、痛み止めのボルダレン投薬も効かなくなるほど痛みに耐えかねる日々、また大量の吐血もして、結局最後はモルヒネ投与となりました。

モルヒネが投与されると意識の錯乱や混濁が起こり、内臓の機能不全により肺炎を併発したため呼吸困難な危篤状態が数日続き、投与から１週間後息を引き取りました。奇しくも１月８日は父親の命日と同日でした。当時葬儀は近所の協力を得て自宅で執り行うことが通常で、自治会始まって以来の大勢の参列者、道路に立てかけられた多くの花輪や庭いっぱいに飾られた生花の数々は、どこぞの親分の葬儀かと思うようだったと今も町内の語り草となっています。

平井初美（以下、母）が牛乳パック再利用運動に取り組んだ経緯は、以前パック連通信 128 号で触れましたが、（https://packren.org/pdf/no128.pdf）地域ぐるみで子育て生き方を考える自主グループたんぽぽの活動を進めていく中で、近所の中学生少年Ｉを２年にわたり預かった経験も運動のベースになったのではないかと思っています。

Ｉは近所でも素行の悪いことで評判でしたが、その生い立ちは同情に値するものでした。生まれてすぐに母親が亡くなり祖母に育てられ、その祖母もＩが小学生の時に亡くなりました。父親というとギャンブルで借金まみれ、酒を飲むと暴力をふるい、Ｉは家にいられず隣の八百屋が積んでいる段ボールで夜を明かすこともしばしば。中学生になると地域の番長という札付きとなり、学校でも担任から鼻つまみ者の扱いをされていました。

ある時Ｉが腹痛のため道端で苦しんでいたのを母が見つけ、病院に連れて行き学校に連絡をすると担任いわく「それは、仮病ですから帰してください」と。しかし実際は盲腸であることがわかり、母はこの担任に抗議し学校で大喧嘩になったとか・・・

そして毎日病院を訪ねＩを見舞い、食事を取るようになると食べ物を差し入れたりしていると、退院が近づく頃「おばちゃんちに行きたい」と言い出しました。DV の父親の所へは戻せないと、母はすぐに私たち家族と話し合い家族全員で受け入れることを了解しました。以降２年にわたりＩについて学校や児童相談所とこまめにやり取りしながら同じ屋根の下で過ごしましたが、まさに当時話題となっていた「積み木崩し」のような日々でした。ただＩを預かったことで、家庭から漏れたら学校で、学校で漏れたら社会で子どもを受け止める必要性や、家庭教育がいかに大事かを私たち家族は学びました。さらにＩや不良仲間がよく口にしていた「大人なんか信用できねえ！」という言葉に対し、信用できる大人の姿を見せたいという思いこそ、牛乳パック再利用運動の根本であったように思います。

讀賣新聞
1993年（平成5年）1月9日（土曜日）

牛乳パックの再利用運動を山梨から全国へと広げた大月市の主婦、平井初美さん(五九)が八日亡くなったが、平井さんはシュヨウと戦いながら講演会やシンポジウム、紙漉（かみす）きの実演にと最後まで走り続けた人だった。

牛乳パックを再利用した和紙作りを指導する平井さん（右から２人目、平成２年夏、大月市民会館で）

病魔と闘い全国を奔走

牛乳パック再利用運動の平井さん死去

飽食の時代を省み「物を大切に」実践

平井さんは、地球環境保護が現在ほど声高に叫ばれ出す以前の昭和五十九年九月、大月市で自主グループ「たんぽぽ」を結成。牛乳パックの再利用を通して「使い捨て生活」の見直し、自然や命の尊さを子供たちに伝え、障害者の社会参加を支援する運動を始めた。

「親の背を見て育つ子供に、親はどんな生き方を見せているのか。物や金があり余る豊かさの中で子供たちは人間らしく育っているか。そんな反省から、せめて物を大切にする実践活動をしようと行き当たったのが使用済み牛乳パックの回収でした」。平井さんは生前、「たんぽぽ」の発足にそう述べている。

翌六十年六月、わずか十一団体で発足した「全国牛乳パックの再利用を考える連絡会」（略称・パック連）は、今では、全国で二百五十以上の団体が加盟するまでに成長。六十二年五月には、大月市で全国大会を開催。以来、毎年、全国各地で全国規模の大会を開くなど運動は盛り上がった。

この間、平井さんは、パック連代表として講演会、シンポジウムなどにと休む間も惜しむように全国各地を飛び回り、平成元年二月にはドイツ・ケルン大学に招請され、学生たちを前に講演したこともあった。

しかし、こうした激務がたたったのか、昨年一月、以前に摘出手術を受けたことのあるシュヨウが腸に転移していることが判明。もはや手術によっても除去できないほど進行していたが、いったんは退院。同年八月には、北九州市で開かれた第六回全国大会に出席し全国の会員を激励した。

パック連の第五回全国大会で平井さんと共にパネリストとして出席した甲府市職員の内藤宥一さんは「平井先生は仲間のネットワークづくりのためなら自分の体も顧みないでどこへでも飛んでいく人だった。昨年六月に退院したと聞いて自宅でお会いしたが、元気そうだった。尊敬していた人を失って、たいへん残念だ」と話している。

山梨日日新聞
1993年（平成5年）1月15日　金曜日

(11) 家庭 2版　（第三種郵便物認可）

牛乳パック再利用 全国へ

平井初美さんを悼む

三枝佐枝子

平井初美さんが亡くなった。一月八日の朝、その電話を受けた時、「ああ、やっぱり」とつぶやき、胸につき上げてくるものを、私はどうすることもできなかった。

「全国牛乳パック再利用を考える連絡会」代表として、病を押して東奔西走しておられた彼女は、いま、仕事半ばにして私たちから去って行った。どんなにか残念であり、思い残すことがたくさんあっただろうと、彼女の無念さが、私の心に伝わってくるのである。

平井さんと知り会ったのは、私が県立総合婦人会館の館長となって間もなくの「女性フォーラム」の会であった。

平井さんは地元の大月市に「たんぽぽ」というささやかな自主グループを作って、子どもたちの非行防止に取り組み、また青少年から高齢者まで幅広い人たちを集めて、本音での話し合いの場を設けておられた。彼女の活躍ぶりの報告は誠にすばらしく、魅力的であった。

平井さんは「たんぽぽ」の活動の中で、子どもたちを非行に走らせないためには、子どもたちにまず物を大切にすること、物を生かして使うことを教えることが第一と考えた。

牛乳の紙パックを集めて、自分たちでこれを溶かし、はがきや名刺を作るなどの活動は、こうした子どもたちへの愛から始まった。そして、その運動が日本全国にひろがり、大きなパック連の活動に発展していったのである。

彼女に会った人々は、まずその真摯(し)な物の考え方、激しい情熱に圧倒される思いがする。そして、いつの間にか彼女の世界に引き入れられてゆくのである。私の研究所で彼女を招いて行った勉強会でも、参加者はいつの間にか彼女の話に魅了され、彼女のファンになってしまった。不思議な魅力を持った女性といえよう。

パック連の仕事は、消費者がまず立ち上がり、企業や行政を巻き込んでゆかなければならない。彼女はそのリーダーとして、持ち前のねばり強さと情熱で、行政の門をたたいて開かせ、企業を説得して味方にした。そして大月市に生まれた一つの炎は、日本全国に燃え広がって行ったのである。彼女はドイツにも招かれて、牛乳パック再利用の実演を行っている。

数年前にがんの手術をされてからも、彼女の明るさや情熱は失われることがなかった。病院では同室の人々の人気の中心であり、皆の心をなごませていたと聞いている。

そして、がんの再発。しかし、彼女はこの苦しみにも負けなかった。昨年夏、九州で行われたパック連の大会へも、暑い中を病を押して出場されたのである。

しかし、彼女の意欲も、彼女を愛するご家族やたくさんの友人の願いも、病気を克服することはできなかった。

いま、環境問題は何にもまさる大切な問題として考えられている。しかし牛乳パック古紙の問題をはじめ、多くの問題が、ある種のデッド・ロックに乗り上げている事実も否定することはできない。

平井さんがこれから戦わなければならない問題は山積しているにもかかわらず、彼女は道半ばで消えた。彼女のまいた種を、どう育てどのように実らせるか。それは私たちに残された大きな課題であるといえよう。

（前県立総合婦人会館館長・商品科学研究所長）

さて、全国パック連前代表平井初美が亡くなり次の代表をどうするのか、パック連関係者による協議がすみやかに始まりました。当時私は事務局員という立場で、全国パック連の活動を手伝っていましたが、主要な支援者から「ものを大事にする大人の姿を子どもたちに見せる」ことを大目的としている牛乳パック再利用運動であるから、その背中を傍らでずっと見てきた成子さんが継ぐのが一番ではないか、と突然指名され大変戸惑いました。母もまさか、私が代表を引き継ぐとは思ってもみなかったと思います。

しかしながら、前代表逝去の３か月後に行われた「平井初美を偲ぶ会」において新たな代表を発表した際に、支援者のお一人であるグリーンコープ連合の行岡専務が「連帯は無条件でなければならない」と述べられ、この言葉に心底支えられて気が付けば３３年、牛乳パックリサイクルの生き字引となっています。